

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 英語学

赤楚 治之

2021年はEdward Sapir (1884-1939)の古典的名著*Language* (1921)が出版されてちょうど百年目にあたる。ある研究会でSapirの有名な句“All grammars leak”に言及したおり、フロアーから「漏れ」を積極的に認めるのが認知言語学であるというコメントがあり、言い得て妙だと感心したことがある。それに対し、「漏れ」ない部分だけに対象を絞り、文法理論を構築してきたのが生成文法であると言えよう。言語進化の問題(Darwinの問題)に軸足を移した生成文法(最小主義プログラム)は、言語機能に自然法則(第三要因)が如何に関与するかという問題に向かっている。根本的なところで全く異なった言語観に立脚するこれらの二大潮流は、敵対視の時期を経て、健全な言語研究を共通目的とし、お互いを認め合う「歩み寄り」を目指す努力が藤田耕司氏らによってなされてきたが、未だ、その接点を模索中であるというのが実情である。

このような理論研究の現状や英語の記述的研究のこれまでの成果が概観できるのが、*Oxford Handbook in Linguistics*シリーズの一巻として出版された[1]である。この便覧は、研究領域の「現在」を眺望するには絶好の書である。生成文法研究者としては、90年代半ばから生成文法の枠組みで、談話上の情報構造を統語構造の階層性として捉えることで、興味深い(記述的な)研究成果をおさめてきたカートグラフィー分析への言及がほばないという点が惜まれる。それを補うのが[2]と[3]である。ラジオ・テレビやインターネットなどから収集した口語データを用いて、カートグラフィー分析の記述面での有用性を検証したもので、非標準として扱われることの多い口語英語における変種(variation)にも、独自の体系性が在ることを教えてくれる読み応えある研究書である。(なお、*Relative Clauses*に関しては、この領域を代表する研究者のCinqueが[4]で興味深い仮説を提案している。)日本におけるカートグラフィーの第一人者である遠藤喜雄氏が前田雅子氏と共著で著した[5]はこの領域を研究する上での恰好の手引き書である。統語部門における新たな道具立てを活用するカートグラフィーは、言語進化の観点から統語構造を極限まで絞りこむ最小主義プログラムとは相いれないものだとする誤解が見受けられるが、それに対する著者たちの考え方を知ることができ興味深い。共感(empathy)の研究を軸に脳科学との接点が模索されているという。このような動向から、カートグラフィー研究が認知言語学と生成文法を結びつけるインターフェースとなり、ひいては表現研究に寄与できる可能性があると見てとるのは評者だけではないであろう。

[文献] [1] Aarts, B. et al. (2020) *The Oxford Handbook of English Grammar*. Oxford UP. [2] Radford, Andrew. (2018) *Colloquial English: Structure and Variation*. Cambridge UP. [3] Radford, Andrew. (2019) *Relative Clauses: Structure and Variation in Everyday English*. Cambridge UP. [4] Cinque, Guglielmo (2020) *The Syntax of Relative Clauses: A Unified Analysis*. Cambridge UP. [5] 遠藤喜雄・前田雅子(2020)『カートグラフィー』開拓社 (名古屋学院大学)